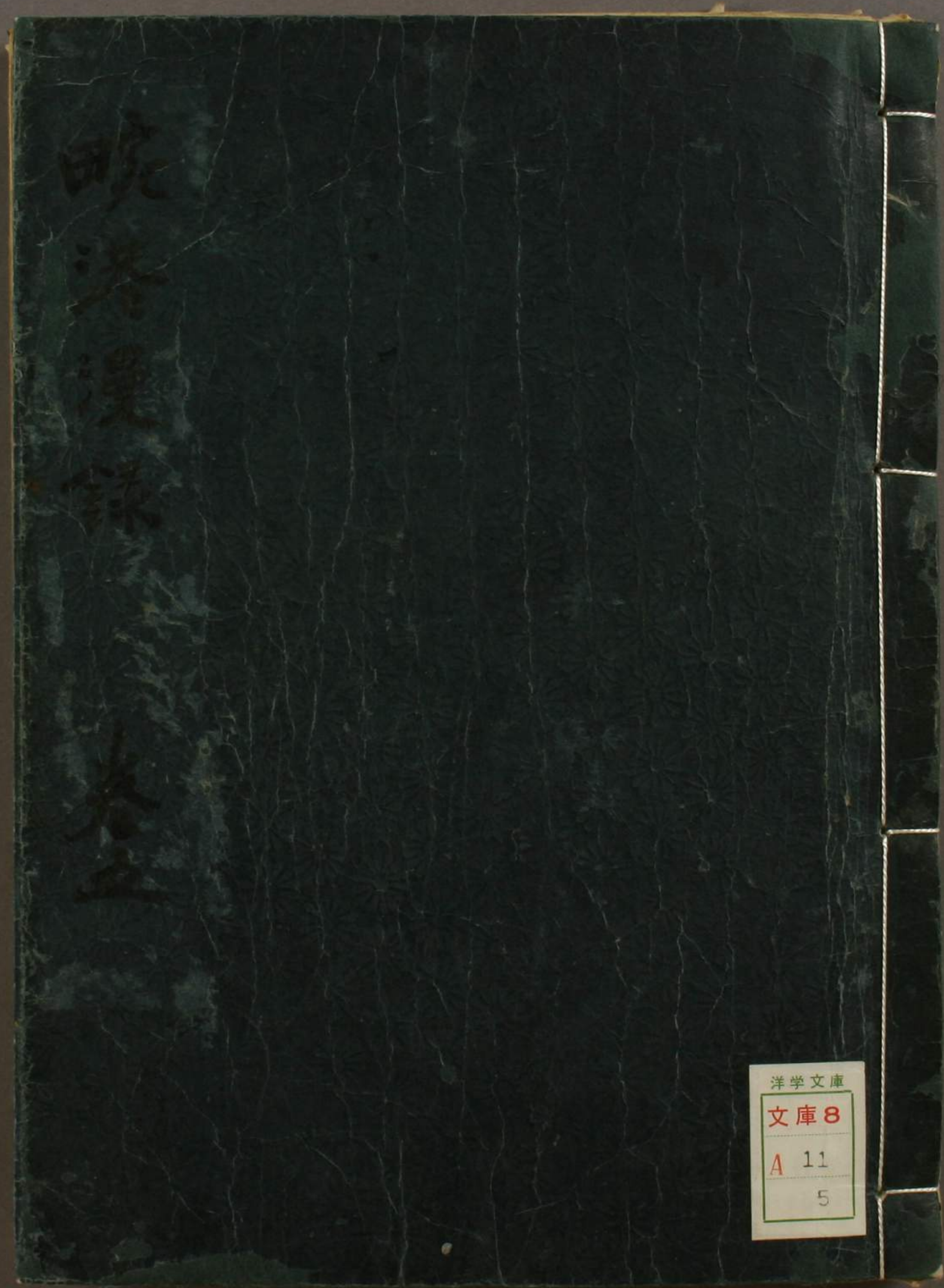
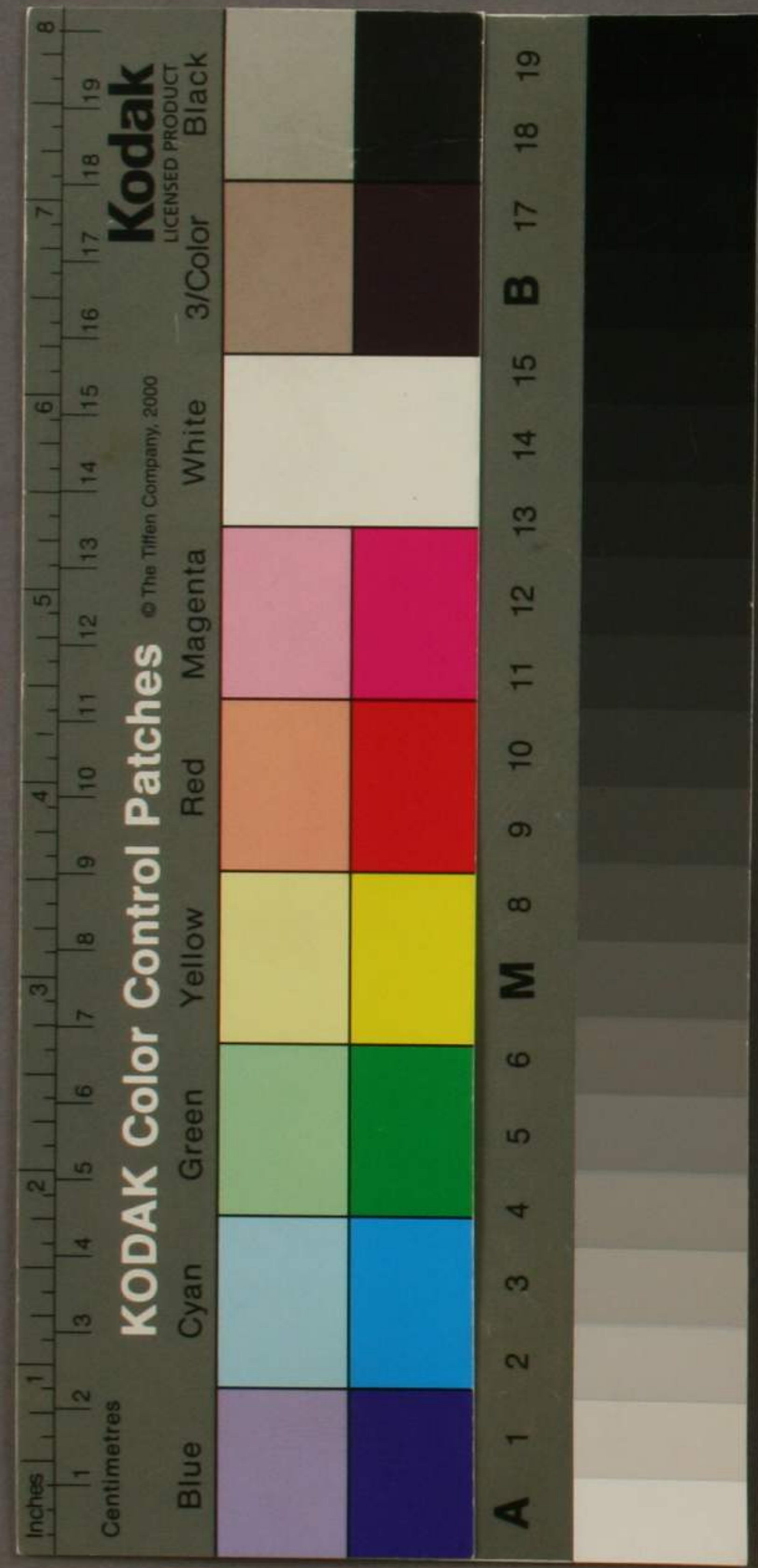




夢遊西郊記

草稿

大觀文庫

特
118
62
5

鳳城

之西郊十三四里外有藥圃享保年間營

為謂之子駒場御藥園本邦諸列所出凡百草木及

漢種廢品無不種蒔栽植者置吏植邱某令司之培

養灌溉採枝葉收根實曝乾修治至秋末則

此出于

頒賜醫官諸公是。德廟出于溪仁廣濟之厚

縱

意云不與其事者不許要觀之余夢寔寐于

此十餘年、日諸子未飲、辨藥物真偽、論治術巧拙、劇談竟日、傲然盡斗升、皆醉如泥、既而辭去、余亦潦倒就睡、夜半有夢、一友人曾生、偶來叩余廬、生覃志於赭鞭之業者也、生日、余與園監某者、有舊、欲私請與子輩相俱觀之、子豈無意乎、余踴躍喜曰、固所欲也、願俱與耳、於是期以孟夏廿七

與偕

陰

至

予

雨不果、至月尾、雨後新晴、宇明卿從心通、不已、故余促曾生再改卜、期以本月初朔、昧爽集于吾晚港之舍、此日余早飭待諸子、天既明、曾生引一盤生山田某至、宇明卿田士業、尋至、時近五鼓、曾生日、余嘗與他諸士約會銀街棧棠亭而相共發、請諸君無後、遂與二三子及余鄉人珉治、輒發欲過其亭及

至市門同遊諸子稍稍咸至日新山健藏曰北
 條英次郎曰大平元安曰竹内玄壽曰井上健
 貞曰日野十兵也併跟隨通計十有三人各戴
 笠著校衫一如遠征之人同遊之士醫家居多皆
 髡頭也往還之人笑曰猶大利門徒僧向晚訊經
 呢喃群行都門衆亦共笑余亦約同僚渡子謙

同行過期尚不至故余引諸子訪其舍于山王街
 子謙前宵宿疾頓發今朝尚未起以故謝從此
 取路於幸橋門外傍御溝抵靈南阪又沿溜池而
 行諸子或後又先漸而至赤阪門外士業僕奴後
 不至士業拂然曰痴漢何為迎遭後我暫時寄息
 一商家待其未至然未至於是余等殊困曰令彼
 擔行尉諸是若彼不至則奈山中叔心飢何然

先行者既過六七里久不可滯于此故物色僕之

形貌託商家回顧徐步數十武北抵青山百人街

僕逡巡追及衆拊喜自此急路至一關戾別邸之

道南有一茶店諸子先行者憩焉而俟我輩

前諸子憩于其南傍之一茶店待我輩歸其亭曰

初明庵亭前有此紫藤架筑此紫梅今花已謝垣外

有藝苑栽諸木中有所謂貝多羅樹各採葉畫掌以

史

素

則

之為黑色余別有貝多羅考此物嵩山記所謂似貝

者耳

多榻上置一典諸風客之誅歌題曰發句狂歌二色

集匆匆之間余撰詩勝不得憇息一少時又各西嚮

而行遂抵道玄阪行數武左右田野漸入佳境忽忘

市井煩囂又行僅數步有路岐傍有碣示左右前途

湮滅不可讀左折至玉水云取路於右則所謂駒場

則

非及系
句狂歌
可厭
乎則
不雅
以義

與

也是日也、天宇晴霽、四顧無纖翳、杜鵑聲、嘒雲際、鴈鳩阿公阿婆、鳴茂林、衆皆喜、卜得今日、大呼哉、行行採草葉、折枝朶、每曾諸曾生皆以墨汁記其名於紙條、以結梗莖、時不見健負里許、佇立回看、乍賒得一樽、呼衆、栩然、與手其樽、曰、諸子作氣、吾載一尤物來、各喜笑、曰、欲午、漸至官園

酒初至而

示衆

館外、曾生先入、諸子待門外、曾生即出門、曰、諸子

主公將出之

屋近

速來、殆哉、我舊令已出、欲之都下、余等至後半時

殆使

則今日之舉、空矣、各相携、乃而入、其人出迎、衆且謂曾

生曰、予雖他適在外、託屬吏某者、使導之、就被謀

西

於此、健負

觀、且詰、願勞其人、以一樽、而辭別、故以今之所推、乃

吾輩觀之、餘無一注、意於彼物、今乃奪之、其本、解、如

輒贈之、衆皆相、私語曰、恨失我輩、觀後餘興、失左右手

予之、又、也、

竊笑、士業之僕、奴、有志于鑿、曾喜今日之舉、而園中

殊不許從僕於是乎僕悵然失望余忽生一計謀

衆又從而拱械九十其儀則嚴然一士人矣乃

諸曾生借與余長刀及短掛即為佩兩刀之士共得入

園中屬吏持門鑰啓行先為之導開郭門入則滿

地闢壯畝畦園疇肥腴衍沃千草萬木栽蒔和

漢諸種生苗抽莖皆多非常所視也右往左行曲

曲回轉巡臨見曾生一一指示各得縱觀焉從此出其

門又左轉入西園亦如東園然而但別見韓漫圃

數畦其一方有桂樹數株鬱然自為林不知幾何自

其至最為喬木者則本幹有數十圍者衆皆愕然

以為

者疑至于山畦齊狼係熟帶之地觀畢巡盡稍

而出西郭謝導者而別人皆有菜色驟集其館

中一廡屋中掃蛛網除塵埃得所有之藁薦

或展開所齋之裏祇以席板上環坐乃開行厨

就食以息曾生請求一茶確於旧識未各棄渴引飲

余携一瓢纔可容三四鍾不足十數人各飲一小盞最

微醺又然只當憾往之所為贈之一樽耳居暫

時出門日尚午中衆皆曰速去此空歸都下身

澄爽美日為可惜焉轉路謀撰他之勝地諸子或

曰堀内或曰碑文谷或曰驪山衆議未決一人就農家

問前路之遠近而欲行之地皆遐濶匪近余斷然曰尋

未曾到之地議決于碑文谷故復未路下道亥既余

路傍摘野薔薇花是為供藥用也以故後諸子漸

入道玄街一兩輩入店以飲余亦憩次生雞卵下酒

献酬一再各神益旺一醉行去焉就問碑文谷之

步

其乃識

腰下僅

至此亦益

徑歸

何殊

耳俾

往

濶匪通

斷

見

有

行摘耳

不

鳥吃

行者則其直路也時新山北條山田三子

浩然
取三路

意

而歸是為無徑蹊也故不敢留之乃傍其河側各

傍川之路

取意行左方皆農家蘆藩茅舍清隱閑寂自有

雅致幽邃可愛亦佳處也皆云此地如武陵桃源而無

桃者耳有吹烟者有放歌者前呼後應狂言戲語

相歌相和而行一二里則架圮橋即河乃赤羽水之上

剖葦

流云過其橋右則左右田畝麥穗芄芄然益愛村野趣

麻雀啾々喧葦叢之間又行里許林樹杳然得一

大門號祐天寺此是三緣山前住持祐天僧云退

隱後草創焉儼然一名區也各抵寺門一覽而出

又行數百武右方有一巨樹一老嫗倚樹根

供

レレ立

救

設茶店各小憩啜其茶則葦不可口但凌一時

年通
此猶世語
云貧賤
被奪正
屋
氣味

車

之渴而已距此不半里而達碑文谷後門入則社

中安釋迦堂境內稍廣祠宇頗盛有仁王門疲

癰沈痾祈于此有靈驗此近時多尊崇齋願之人

特為
過絕於本社

香火之盛也社內左右開店待客且粥線香是

買

實愿之人為獻左輔右弼二金剛也出前門左側

掛大木屐狀宛如案板而偉大近邑人所獻也從

店

此直行則至池上新田云再取原路下憇後門外酒

江戸亭村婦頗有容色此入社之初明卿所曾卜且

贊

有賴

厨下物

鹽裁也欲呼酒更無者唯有淮南王而已特水極

連

冽寒氣尉齒各乘熱吞飲數碗健負謹且罵曰村

饗也

伶利

否

醪酸醬不可食村婦頗靈利勵聲曰我酒致自都

下廼芝門源助街所彌而味最醇也試之頗美雖

亦可厭也

此肩

德

儔

則不墨水男山之美非。醅醖殺魅醪之類。且村婦

乃指以謂衆曰

算

好獻笑勸酒。如此下物。詎問聖賢。從此舉白。遂無算。

傲

各取醉狂態百出。高談敖笑。傍若無人。於是錫時

縮得孔通

盡屢乞其隣肆。衆皆詰曰。源助街甚在。乎近仙女

豈假費長房之術乎。日二懸車。意盡而辭別。過

小徑田莊二里許。至驪山。攀石階。謁不動尊祠下

則日已浴。虞淵。此屋少婦。皓齒競要行人

嘖嘖不止。似鳥雀語也。此為賣飴糖與花糕也。暫時

後步

入店息。二三子又吃了酒食。去此。抵行人阪。日已

西沒。各棄醉。或諷詩。或唱曲。遂經伊沙羅鶴。抵聖

皆謂曰

坂。饌一茶肆。同遊之士。後不來者三人。昔劉阮採藥

天台。迷失道路。三子亦恐度一山。出大溪。遊南浦。

仙女之境乎。此夜天色朦朧，前程黑如漆。余等

撥暗冥行，自太初橋邊右抵將鹽橋，過緣山

來道市店，張燈如星，行人如蟻。

前門外，出大街孔道，左右滿燈，往還旁午，相

南往北還，旁午雜沓。

推乃北十數街，別諸子于銀街，夜正初更，引士

而年亦自書。

辛

業入余廬，箕踞又一飲，告別。嗚乎！今日之遊也，金

之文。

之友，醒

以起于平素所欲觀也。

蘭莫逆，相值相携，乃開心腹，吐情素，大滌塵襟。

且得僧宿志。

抑山懷精神。

唯

春未之歡娛，放散舒暢，余心樂甚。雖然，也。是日

往還既五六十里，而稍近，疲且憊甚矣。腿酸足

茶然。

夢然。

痿恍惚，就其辱熟寐至日所。已覺起，窺東窗

旅舍靜寂，無一人。

不覺其夢也。

日高三竿，而尋曾生不在。噫嘻！我知之矣。宿昔

之素願，鬼神幸有佑之。夢裏而得至其地者乎？

替

我

雖則醉臥昏寐之所，夢遊彷彿乎不可記。覺

遽然覺
則一夢
也

後且疑且喜漫然記其顛末而色矣

寬政辛亥仲夏

晚港磐水子記

昔者黃帝夢游華胥氏之國趙簡子嘗夢釣于廣澤人
同所夢者得同其神之所知不獨往見其夢也予之
有是記勿謂是文詞繁瑣情致可娛庸子確乎歷
歷如可指數曲盡龜刻今讀之有恍然如夢之同不
其這似亦定是知夢心之所獨不在夢中其樂也
多以此辛亥之秋
松岡宇子後

題地予箕輿地次其如萬撰著利氏且圖

獨行子評其評曰評哉々々
何其評之實甚不啻使作
者感其為於其間亦足以入
讀此評者戒懼隆省曰自家
條之士猶且其自操心若是
有方知下焉者豈東游西
觀南經北過從意所趣苟取
快樂而可哉嗚呼作是評者
其知方乎

船猶士著他斯

寬政

昔者有
間所
有
其
如
可
其
其
其

其此北斗。

不^ラ知^ル子^コ

予箕求衣于瘍醫、刺修唱蘭、且旁嗜
輿地之學、醫巫官桂川日池君亦固有志於斯、
次其和漢地圖先輩所撰、既已不鮮、他
如萬國、古未無有明、西數可據者、迺欲有
撰著以補千古之闕典、獨奈明末西士
利氏所譯六軸、若坤輿全圖之類、猶
且圖記悠謬、未能盡確實、其餘西舶

所齋周未、徃徃挾之。亦唯鏤版久、年代遠、
莫足次據正、每以為憾矣。近及聞吾鸛齋
先生所獲、西刻地理之書六本、廼是彼土
之人、非蒲湜兒所新撰、其圖其說至詳
至備、復與二廼俾予懇求焉。是書也、實
一大奇編、和漢古今所未曾有也。深藏之
珍襲之、不輕示人、特於是請、幡然見許。
蓋臭味同好、感君等之篤志也。夫然

無

後君之喜可知也。遂與予不佞、投閑相會、
不問日夜、讀其說、閱其圖、新製衣一幅、依
法畫線、分度、大小各國名稱等、易彼國
字以漢音、每會考索、始于一隅、施及中
土、自中土迄其一方、遍地週遭、不覺燭盡
晷移、唯是圖畫之纖悉、文字之細密、殆
不敢廢更得乎目昧心惑、恍惚失其本末者數矣。

地理之書諸本按于

地理之書諸本按于

爾後不佞東
歸鄉里西遊嶠
陽、事務鞅掌、
不得與謀焉。
而君雖勉不
敢廢更得

訂

添寫用筆削訖、不輟。

君之功
豈不偉
乎

彼諒乎此。凡七八年、終得全成。此為今
圖、仍輯其各地名號、分界土產、方俗之槩、別為
三典、以便於照圖而觀。夫士之抱雅志、雖
願欲遍歷八荒、而窮方域之至大、非假羽
翮、則不能也。此圖一出、無道里跋涉之勞、舟
車資費之營、風波寇賊之警、不出戶牖、
周知萬方、廼至其天度所合、地界所分、精
覈著實、不復容疑、可謂盛舉矣。方今

聖運日躋、治化被海外、梯航九萬里、遠人
慕義來貢、是圖之成、壹其餘澤之所致、
豈可不感戴哉。豈可不感戴哉。寬政辛亥
之春、僊臺侍鑒玄澤、大槻茂質撰。

割法大畧

解剖し法

一番

先づ肩より腋へと流す事を
さき腋とのこし腋を横
骨と山を又横に力を知
腋より部とさき寸分を
其節は少しもくし
ノ所とをさき部し

此と腋よりし氣龍の事をいふも
是也

二番

トヨリスラヒ上
其次波をとりて白波を
五ノ肋木にたてゝあそ
つ刀をくくひとて

三番

又く下とてしき
部を福りさめ
きるあそ
そくをくくへん

四番

附と人後部を
腸のとてあそ

五番

其腸細とてのけ
右る位する肝
胃腸の位置と腸
やあそ

六番

其肝とてはけ
らる腸動脈
地さく
けとてい

あそ
れ

常志天
肉大腸

人々々々々々

[illegible]

陽春中下
 陽春中下
 陽春中下

卯ノ真中下
 暎ニ金ナク
 卯ノ子ナク
 酉ノ何ヘケ
 ケル日梅の国
 ナルル石ナク
 子ノ子ナク
 午ノ子ナク
 申ノ子ナク

八

腸とじりけい臓の大管
肝と胃ととととととと
其の腸膜とアムニオン
又其の腸膜とアムニオン
と人に見えん竹管ノ多あり
此の管は和名白の管と云
れと云ひけり切らぬ
能く云ふ

十番

の所を看とらん食民のより
竹管を吹けど胃ノ氣
張起すは胃下にある
膜よりしてさうさ
ふれい神人さうさ
共よりん丁は腸をさ
んとさるる

腸を信にさそれハ
花より共脾より小腸を
門脈はさうさ

十一番

は後胃のより部
びくくは中より
る腸の位置とさ

十二番

る腸の位置とさ
病腸の位置とさ
さうさ

十三番

其腸をさうさ
脈の大幹とさ
横膈をさるる

十八番

伝莖を根よりさう種
承乃うん又承乃の色で
再びさう其の管をさう
聖聖丸をさう其の中を
さうさう

十九番

胃の上口を承乃さう其
中をさう其の横隔膜
をさう其の血脈をさう
胃とさう其の中を視る
その辨あささうさう

廿番

廿一番

肝脾と利さう其の中を
さう其の辨のさう其の中を
さうさうさう

廿二番

○此は、肺と
縦隔膜と
さうさう

肋骨とさう其の中を
其の皮とさう其の軟骨とさう
さうさうさう
肋骨とのさう其の中を
心と肺とさう其の中を
さうさうさう
さう其の中をさう其の中を
さう其の中をさう其の中を

廿三

心のほろろとふるふ
ともしきつとふふ
瑞切し其の中とみだ

乙、多岐うき
 乃我御ハ食井
 環妻事ニ実少
 河ハ春とのほふ、な
 意想ハどうと成り、
 人ハ^{きよ}世ハ^{きよ}常
 米の^{きよ}國^{きよ}き^{きよ}
 一、^{きよ}河^{きよ}き^{きよ}一^{きよ}失^{きよ}河^{きよ}
 物^{きよ}山^{きよ}に^{きよ}肝^{きよ}安^{きよ}と^{きよ}知^{きよ}人^{きよ}
 若^{きよ}物^{きよ}を^{きよ}き^{きよ}く^{きよ}あ^{きよ}は^{きよ}く
 小^{きよ}河^{きよ}ハ^{きよ}腹^{きよ}一^{きよ}き^{きよ}

世に風多と活るに
物多にふり多し書け
との云ハすつふうに
とり形より
矢後炮ハ南より上
刀ききりりりり
学又ハ理と知る
悔意の者ハ水とあり
人半いんより秋非と
信ハ家獄と書いり
信ハ家獄と書いり
信ハ家獄と書いり

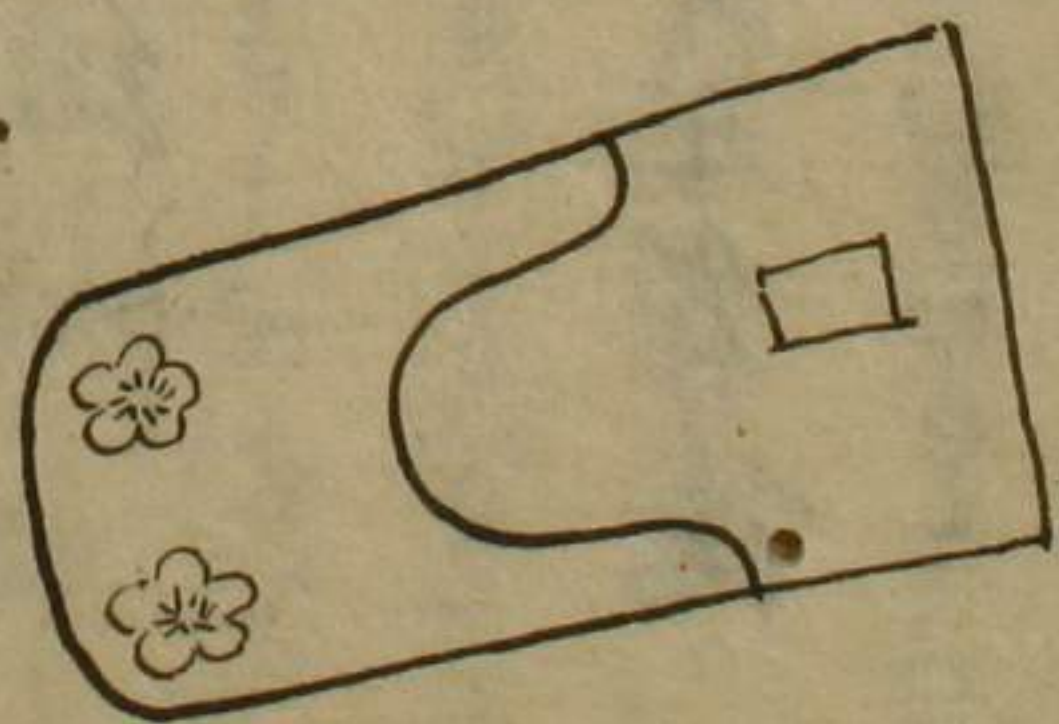
吾小と云ふハ必滅
と云ふ者ハ必滅
と云ふ者ハ必滅
と云ふ者ハ必滅

以上

人間界ハ人々を教ふ
苦といふ世の中ハ
一々不夫不貧富
不悦不悦ハ正
不悦不悦ハ正

愚者恭謙讓 仁義禮智信

遠引豊田郡月村持入大倉石姓印十
 湊之石抄候也七セト石
 色金銀のきくり候毛の
 物事ほくむいさふ
 へん先様のきくりすき花
 むの持とふくことむや



人柳氏をきくりしとふく
 又あるきくりしとふく
 中柳氏をきくりしとふく
 中柳氏をきくりしとふく
 中柳氏をきくりしとふく

中柳氏入新島いれき
 中柳氏をきくりしとふく
 中柳氏をきくりしとふく

まうに川をりきふくまゆきと
りとうるみさきにあり

山崎昌流とあいうり安を
依て作のうりれ山崎

さうりきうとそとかいゆひの
み平うにけう流はとこ中

流うとらうと流うとらうとらう

流うとらうとらうとらうとらう

流うとらうとらうとらうとらう

流うとらうとらうとらうとらう

流うとらうとらうとらうとらう

流うとらうとらうとらうとらう

那

上海浪志月々好書屋と象押發

懷素

明澤乃桑ヤの女いとし

又云、（一）に、（二）の、（三）とあり

祝廷

○大石多雄、
隈部、
の

いりやふりのほふふふ

しゝ
つ
ふ
る
う
り

[illegible]

のしきゆ一

のちのち
威人
あふ
ふ

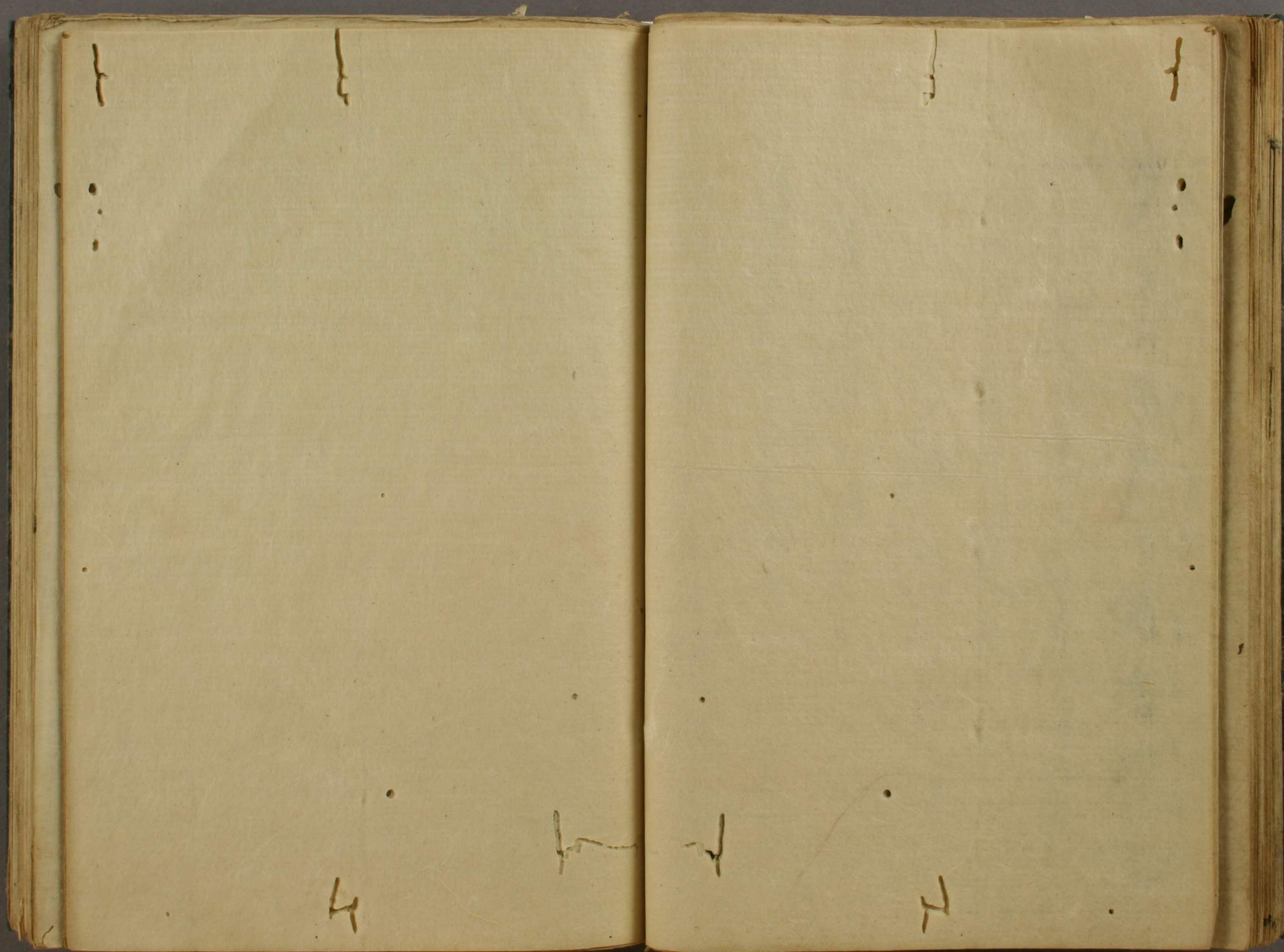
いづれか

ちんのもゝとていへ

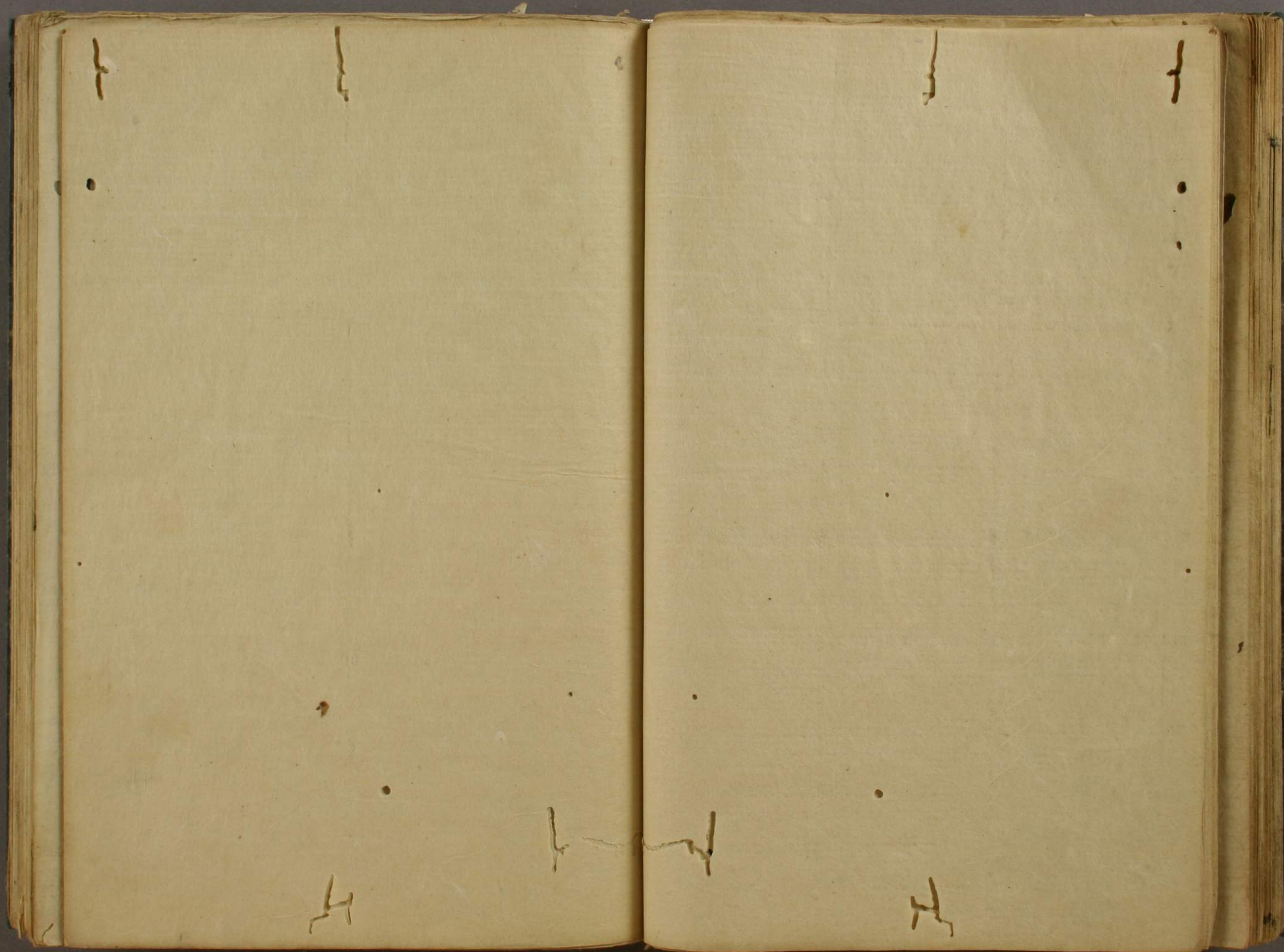
[illegible]

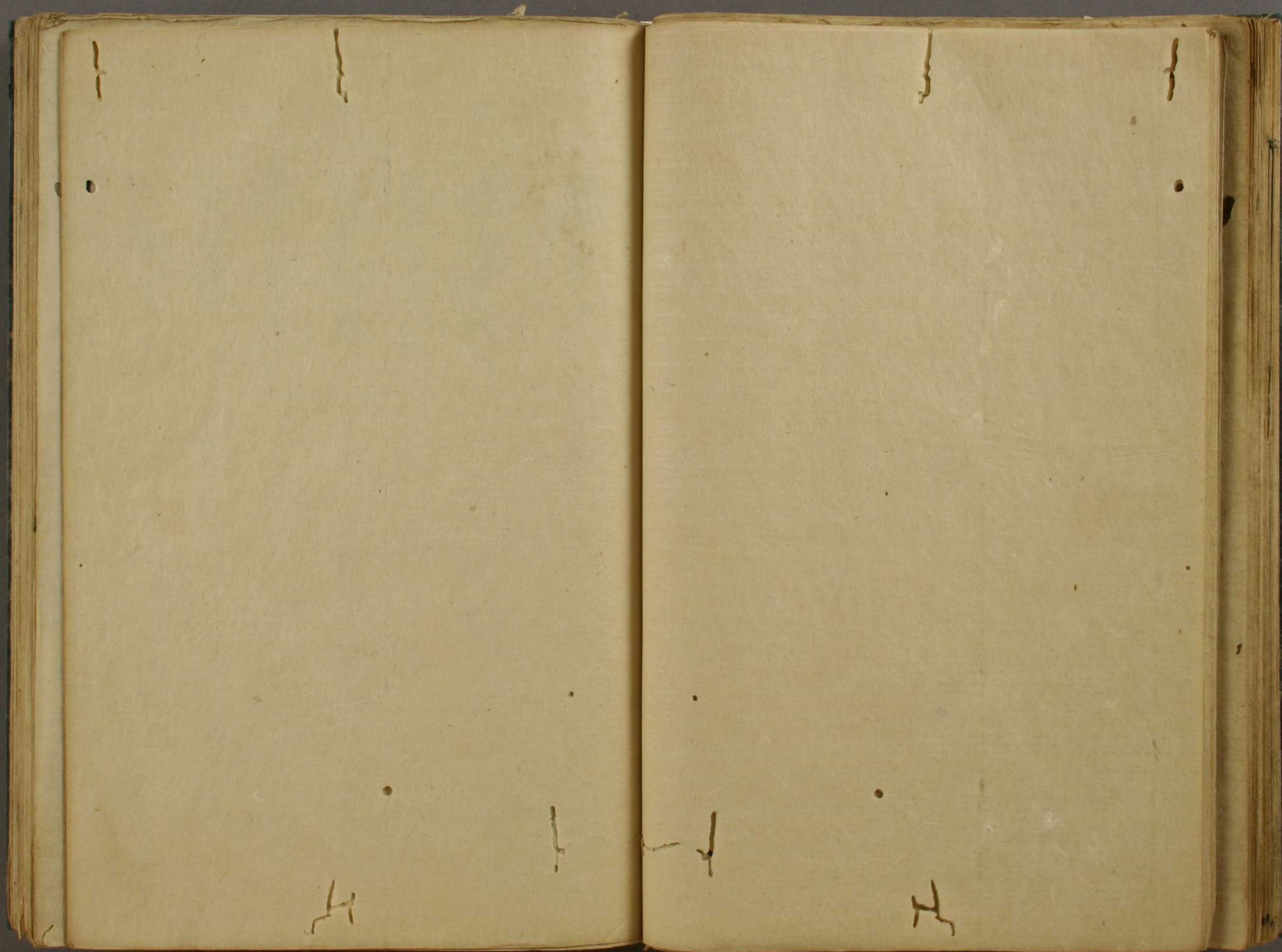
多々くゝん
りえと
俳諧作らう

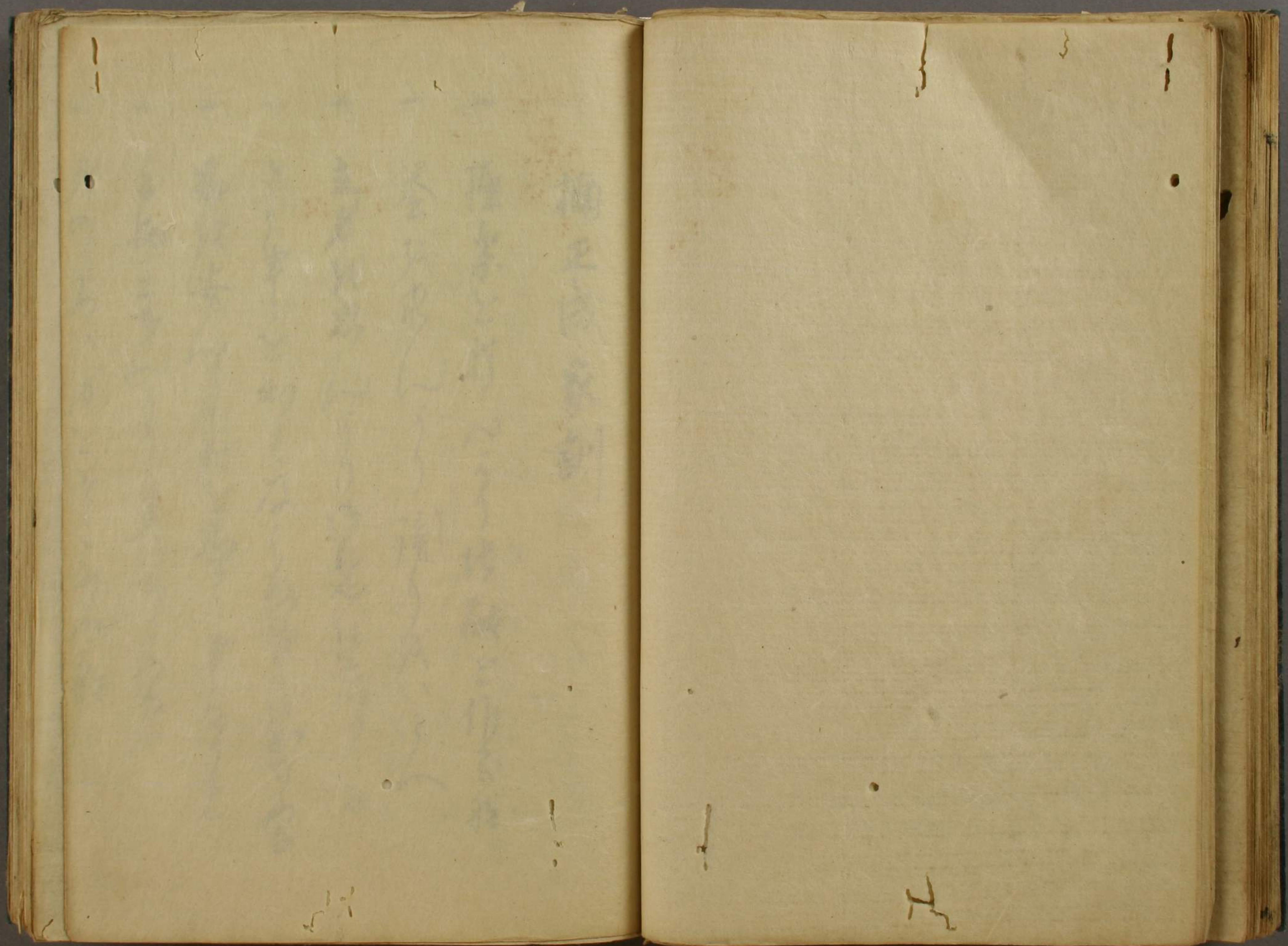
のいそしきとくらへて











楠正成家訓

- 極楽と新へう地獄と作るが
- 養子成るへうは穢しき人
- 立身成思へうは汚辱の世なり
- うる事を知りなれば事成るのみ
- 忠誠安んじて死を恐るゝ事ありき
- も物なきへうは家にらるる
- 才のみにあつてこゝろのね

一 我々命を主れよの私を捨るれ
 一 金銀をんうり借銭をるな
 一 古ハ来なる徳ふりて永きものなり
 一 道と徳とを背けりてても中へおのり
 一 善ふハ天性小徳も大徳もいふ
 一 爲ハ徳食をとりて人の心へ我の徳を
 一 人ハ名利をうりては一生を苦しむ
 一 善ふ事我徳を知りて事成るる
 一 礼をうりて人の心へ我の徳を

癸卯浅間焼記

天の卯三卯の水冬月未戌九日小田原を過ぎ
ふれとふに雪こめとぬやうな形とていふ人
と記のふくふのふに語るんれを度ふやうな事
木の葉ふくふとてふれのふくふとていふ人
ある海百うん然もふくふはいつかいつかふ
此國よりふくふとてふれと人といふれとて
をふくふ二日みほおれふくふとていふ人
月おのふくふとていふ人といふ人といふ人
ありとていふ人といふ人といふ人といふ人

あつらふ海山鳴きなりやう
亦らや風の吹くころに
立にむい乾乃方へあひま
よりやとぬえのり六日れ
これと底もさうにふ妙と
響きとる響れあはれ
あるちうあありぬむん
かきよせたとよ入
詩うちやと名あれくも
あつらふ海山鳴きなりやう
亦らや風の吹くころに
立にむい乾乃方へあひま
よりやとぬえのり六日れ
これと底もさうにふ妙と
響きとる響れあはれ
あるちうあありぬむん
かきよせたとよ入
詩うちやと名あれくも

あつらふ海山鳴きなりやう
亦らや風の吹くころに
立にむい乾乃方へあひま
よりやとぬえのり六日れ
これと底もさうにふ妙と
響きとる響れあはれ
あるちうあありぬむん
かきよせたとよ入
詩うちやと名あれくも
あつらふ海山鳴きなりやう
亦らや風の吹くころに
立にむい乾乃方へあひま
よりやとぬえのり六日れ
これと底もさうにふ妙と
響きとる響れあはれ
あるちうあありぬむん
かきよせたとよ入
詩うちやと名あれくも

たるふがふくへうふはにあらう
まじし度とむくみんをの井を
交りし利いづばちねぬしを
る心獄う然にうぬとを
おうぬやあむううとむえし
ねしむう砂原うはち鳴や
を以しむ七りうぬばとをう
原あちうううあぬ砂きう
もうのれきうしは来ぬう
はにあらううううううう

ふれは門くはめあうぬ
乃きういよかやのるい
のうろ不礎の踏しぬし
はれうう福のきいぬあ
あん人しちきうう唯あや
のよきまぬはもくよ
たうう銘すあうう
のうは海うぬう地
あまう明なう山をい
ううううううううう

[illegible]

是の世に客乃後ふは移りするやの色に紙めく
 己も亦いづまけうまゝをわすれぬものぞの
 ゐか也後り来るむといふもわが花もさうな
 海より来る花は王ひあてまらなくさへうちき
 ころよとこしほにえろ遊し人の面をいとえ
 折ねろろろやアと女しむきて人おしむれハ
 いまも時を申のおうそをを我にやしや折のま
 いらはろろとけとけとけとけとけとけとけと
 度をもみろろの海へともあるよとけとけとけと

[illegible]

木をとりててしる声うめはし何となく
 目をたゆみうめ初めおのしをわめ
 物一夜のまじりてうめくは神も満ち
 あり響きあはしりておきしては
 江とてうめをうめ今昔の逢ひあり
 とていもはれきりておきしうめ
 季いすはあき神もけりてうめ
 ともしうめをうめしてハハとあり
 とおきしうめをうめしてハハとあり

[illegible][illegible]

本家よりうゑぬ心算のしほけんと世の事
 とさひりんや毎人母もなき人
 又あゝ其雅もあひてまをばぬ使ぬ流を
 下ふ山道もまゝきあうりてのまはるは
 そやたゝあゝとて川へおろそ遠ひ所
 とはうゝ法部を利

所よりこれより利みなりあるなり
 形くかみしこれよりなりなりなり
 れよりなりなりなりなりなりなり

昔も藤原公と申し少むうこれ水のあまふに
 いはふなり平津のうねり山のぬきそふん
 ありけといふうらむもさふ河を流し
 けき人の流しありけふ命にふりけ
 まふふありけふぬにけふ人ふりけふ
 水ありけふのぬきそふん山のぬきそふ
 れけふぬきそふん山のぬきそふん
 百ふのうらむのうらむのうらむ
 三ふのうらむのうらむのうらむ

三

以爲

とを他の書名にのみ用ひ、その外は
平書とすべし

方勝の道々菅原も御の旨は
なりとてさきよりゆつゝ有

利根川安政藩より新橋へ向かう所の所を家作と稱す
那より碓氷峠より水戸迄は佐田と稱す
利根川國司の所を松井田安中より水戸迄は板倉
より碓氷川迄の所を水戸より利根川迄の
所を水戸より利根川迄の所を水戸より利根川迄の

海神殿の海よりふもと解き都なり中津武
 藏よりふもと海よりふもと海よりふもと
 其の海よりふもと海よりふもと海よりふもと
 つる川より海よりふもと海よりふもと海よりふもと
 水の海よりふもと海よりふもと海よりふもと
 ちりし海よりふもと海よりふもと海よりふもと
 根よりふもと海よりふもと海よりふもと海よりふもと
 大なる海よりふもと海よりふもと海よりふもと
 海よりふもと海よりふもと海よりふもと海よりふもと
 此の海よりふもと海よりふもと海よりふもと海よりふもと

あゝ。あゝ。

位を料と申すを急がねども村の料
と云ふはそりて例幣使毎年三月十三日
田山通のりなり

鴻承平名勳書

市ノ外ノ陽燈ニシテ、
神ノ名ニ陽燈ニシテ、
ノ名ニ陽燈ニシテ、
ノ名ニ陽燈ニシテ、

陽燈

陽燈

ノ名ニ陽燈ニシテ、

陽燈

市ノ外ノ陽燈ニシテ、
神ノ名ニ陽燈ニシテ、
ノ名ニ陽燈ニシテ、
ノ名ニ陽燈ニシテ、

市ノ外ノ陽燈ニシテ、
神ノ名ニ陽燈ニシテ、
ノ名ニ陽燈ニシテ、
ノ名ニ陽燈ニシテ、

陽燈

陽燈

市ノ外ノ陽燈ニシテ、
神ノ名ニ陽燈ニシテ、
ノ名ニ陽燈ニシテ、
ノ名ニ陽燈ニシテ、

命
子孫承之

陽春早

白雲山房書牘

今日補。時海之存。為師。此通乎。

[illegible][illegible]

[illegible][illegible]

家上往書上子稿

芳名之

天窓より風浩然と吹く。此れは温疫流行の
 ありき節に、高下劇烈な疫疾の過りかたれに、家
 室と控へて山奥へ逃るる親を、お母の中は
 看病病をいせしめて、お茶に足踏ふて逃るる
 りう人留是を憐れむ。ふ仁をとりて、金

云
論
之
事

日中記神代卷系
 神譜の二字、此と割る
 局鵬矢色ノことあり又柳子割る

波	起り	サリ	ルイ	浪り	カ	イ	ベ	ホ	ブ	ニ
波	の	千	波	シ	テ	キ	ム	う	知	う
風	京	好	く	ト	ウ	サ	シ	ニ	ミ	サ
曉	の	日	ベ	ケ	レ	チ	ツ	夜	の	月
屋	中	へ	入	く	ト	ノ	シ	チ	ホ	ケ
山	ハ	を	越	セ	キ	ミ	タ	海	に	近
火	を	焚	キ	ア	ベ	ア	シ	火	を	扱
大	い	泥	ボ	ロ	シ	ノ	ド	小	い	泥
沖	糸	引	く	シ	プ	タ	チ	あ	を	居

波	起	ル	イ	浪	リ	カ	イ	ベ	ホ	ブ	ニ
波	の	千	波	シ	テ	キ	ム	う	知	う	ム
風	京	好	く	ト	ウ	サ	シ	ニ	ミ	サ	ム
曉	の	日	ベ	ケ	レ	チ	ツ	夜	の	月	ア
屋	中	へ	入	く	ト	ノ	シ	チ	ホ	ケ	ム
山	ハ	を	越	セ	キ	ミ	タ	海	に	近	ア
火	を	焚	キ	ア	ベ	ア	シ	火	を	扱	カ
大	い	泥	ボ	ロ	シ	ノ	ド	小	い	泥	ボ
沖	糸	引	く	シ	プ	タ	チ	あ	を	居	ヤ

葉に能く イベ アシカイヤ ありせぬ
 葉に能く ケイウ ビルカ 白くぬい フウウ ウエ
 葉に能く イコチコナ それとやん 子アベ コルシ
 葉に能く イラニマロノ フライ せめて平也 ビラニハ 計ツケ
 葉に能く ヤニシカイ子 葉ハハハハ 計ツケ
 葉に能く タニベ キツラク せめて平也 子リクニ デモ
 葉に能く イカタイ 計ロシ せめて平也 うムラツケノ 計ツケ
 葉に能く ランベカムケ カテウチ 子リボ タラシ
 葉に能く タニ 計ツケ せめて平也 子ワ ヤニベ

スモウ 魯亜人話 日本ノヤシ也

善	ソスノヲシイス	樹名	ソスナ	品名	葉長七分程
次	エロチシイス	樹名	エリ	品名	葉長五分程
旦次	ゲドロヲシイス	樹名	ゲイダウ	品名	葉ハ如針長三寸程 日本ノ松ノ
下	ビフトヲシイス	樹名	ビフタ	品名	葉長五分許
下下	シイシウニシノヲシイス	樹名	シシウ	品名	葉長三分程
五品皆 ナヤニヲ取ル木也					

ト	レーン・シグナルーム	檢名	リニール	品名	薬長ノ合箱
レ	コレスチナム	檢名	コレステ	品名	薬長出の箱
ロ	テトロソルナム	檢名	タートラム	品名	薬に如針取三才 日本、新工
ハ	ヒロサナム	檢名	ヒニー	品名	薬取の出箱
ホ	メスノサルナム	檢名	メスト	品名	薬長ノ合箱

日本人

ヤイキ
プテ

用公と云ふ

ヤイラ
ミツテ

リウム
ドイ

方物志

ヤイト
バシ

アリ

卷之四

ニケカル
ナマシ

ヤイカタ
ア

懷家

シ
● ナ
アイ
メ
ク

ヤイカタ
シヨモキノ

恒也

シヨモ
ファイメク

シカマノ
チカイ

始末也

しヨモ
し刀しま

イテマ
シカマ

終

エカシマ
アイカツ

子个

三

ケアニ
ナリ

ナシコロフ

空の魚

ヤ
ア
ガ
イ
ワ

イロ
もや
るへ
こ子

子
 子

是に依て

完
子
うこケ

子
シ
プ
へ

アヒキ子
アヒキ子

志阿多
足ノコベ
イカシマ

乃
乃
子
子
乃
乃

兀々々々
ホツ
アノキタ

皆か

并

子

到

右

ノハウケイタク
カニビヌイ
アノカルフ

愛ふ
 妹
 と
 の
 ろ
 う
 テ
 ダ
 ホ
 ツ
 パ
 ア
 ベ
 タ
 バ
 と

孝行之事

メツノイヲ、ストロフといふ。此ニ有テハ、世々見ゆ。今ハ
東ノ不見生。是令色如洞。名此路。利高相。此ト
示人分。要處。源也。

健糧

早口つて言ひつゝ千やと申氣に有る。然るに、
 此の色はく偏る如き味に於て其色も亦新に別なる
 味味當と云ふは、その如き味と云ふは、其色をのれ
 終る事あるに似

碗青

エコタニ分丸生石 湯島如ふる平川海河 同利
おねふ^ゴ佛^イ頭^イ前^イとく^イ 湯島如ふる平川海河 同利
湯島如ふる平川海河 同利

碑石

此山麓如名川とて第一番に有るは江戸と油二の如し
不毛なる地を松木が所を以て

清乳石

西熊谷の太田の傍に地蔵堂あり、其の傍に清乳石あり、其の石の形は乳石の如し、其の石の色は白く、其の石の味は甘く、其の石の効は、人々を癒すなり。

石炭

石炭は、山に生ずる石の一種なり、其の石の色は黒く、其の石の味は苦く、其の石の効は、人々を癒すなり。

海松

海松は、海に生ずる松の一種なり、其の松の色は緑く、其の松の味は甘く、其の松の効は、人々を癒すなり。

汶巖

汶巖は、山に生ずる石の一種なり、其の石の色は白く、其の石の味は甘く、其の石の効は、人々を癒すなり。

明礬石

明礬石は、山に生ずる石の一種なり、其の石の色は白く、其の石の味は甘く、其の石の効は、人々を癒すなり。

緑礬石

緑礬石は、山に生ずる石の一種なり、其の石の色は緑く、其の石の味は甘く、其の石の効は、人々を癒すなり。

硫黄

硫黄は、山に生ずる石の一種なり、其の石の色は黄く、其の石の味は苦く、其の石の効は、人々を癒すなり。

温泉

温泉は、山に生ずる水の一種なり、其の水の色は白く、其の水の味は甘く、其の水の効は、人々を癒すなり。

白虎の白虎

白虎の白虎は、山に生ずる石の一種なり、其の石の色は白く、其の石の味は甘く、其の石の効は、人々を癒すなり。

秋萩

秋萩は、山に生ずる花の一種なり、其の花の色は白く、其の花の味は甘く、其の花の効は、人々を癒すなり。

蓮

蓮は、山に生ずる花の一種なり、其の花の色は白く、其の花の味は甘く、其の花の効は、人々を癒すなり。

篠竹

篠竹は、山に生ずる竹の一種なり、其の竹の色は白く、其の竹の味は甘く、其の竹の効は、人々を癒すなり。

牛蒡

牛蒡は、山に生ずる根の一種なり、其の根の色は白く、其の根の味は甘く、其の根の効は、人々を癒すなり。

白熱

王疏

銀瓶

金海氣

ムリカウ

やせ
千コ
四ツ

アイクルベ

カキコルベ

[illegible]

テリシベユベ

アカモコルベ

ロコシ

ヲ
シ
ル
コ
マ

ウルツプ

シブタ子リ

エドピリカ

フシキムナリ

リ子シキ

[illegible]

約

シカプ

キナボウ

熊虎

熊細

ウ子ウ

海床

海獣

いの

熊の如く所々大に喰ふ。熊の如く所々大に喰ふ。熊の如く所々大に喰ふ。

熊の如く所々大に喰ふ。熊の如く所々大に喰ふ。熊の如く所々大に喰ふ。

熊の如く所々大に喰ふ。熊の如く所々大に喰ふ。熊の如く所々大に喰ふ。

熊の如く所々大に喰ふ。熊の如く所々大に喰ふ。熊の如く所々大に喰ふ。

熊の如く所々大に喰ふ。熊の如く所々大に喰ふ。熊の如く所々大に喰ふ。

熊の如く所々大に喰ふ。熊の如く所々大に喰ふ。熊の如く所々大に喰ふ。

熊の如く所々大に喰ふ。熊の如く所々大に喰ふ。熊の如く所々大に喰ふ。

熊の如く所々大に喰ふ。熊の如く所々大に喰ふ。熊の如く所々大に喰ふ。

熊の如く所々大に喰ふ。熊の如く所々大に喰ふ。熊の如く所々大に喰ふ。

イナムケ

フニベコイキ

カササギ

鯨

ノコル

ドナイ

フシニベ

タネ子ニベ

鯨

ヤナニベ

ユリニベ

サキリケニベ

イドナケニベ

鯨

チアカウシ

ケ子ニベ

イシボニベ

イワニトマ

鯨

チキナ

ヤイテシマ

タバコルベ

カササギ

鯨

チカサリ

カササギ

カササギ

カササギ

鯨

カササギ

カササギ

カササギ

カササギ

鯨の如く所々大に喰ふ。熊の如く所々大に喰ふ。熊の如く所々大に喰ふ。

老嫗茶話

ニンギ

乃ノワナヲ入ルモノムリト
ナ、ニ作シ
エトニテ

シヤク

フンペ
コイキ

シヤク
カクイ
フンペ

リキレカムイ

トナカイ

ロ

トキノサ

子

同僚田博安曰余日祇役雲邸得一奇說於其邸
老嫗云東都本街有一少婦患傳尸勞瘵骨蒸
潮熱痰咳脉數肌膚漸消削諸候悉備百藥
無効命在旦夕其兄弟姊妹連年相延皆大於此
症寬牽相傳終及此婦家屬痛哭可知也有一
浪士偶說其家人曰我有一奇方請試用之乎其
法先作小橈中央開圓孔其下底置磁器貯藥水
者使患者踞兩陰處正當於其孔上如此二三之間
必有覺物欲自糞門出之意若有落下則速覆陰
處下橈父母喜而乞之士已傳其法併與其藥患
家如法三四日果下黑蟲一條修纖如髮長可
二尺者落于磁器內蜿蜒蟠伏熟視之眼俱臭

尚活動患家急令人告其士士驟未曰藥家可喜
是得病公之兆也其所下之虫速并器埋諸山陬
絕人烟之地別作一藥劑與之調理遂至全愈後
無復發云就問其老嫗以藥水之狀則曰色鮮紅
如不經煎煮然素是痴騃婦女之所耳無緣
質問詳訊可謂遺憾矣余記此說殆十數年亦
得一奇方於一友人甚似與前說可以相徵往時
先侯有所愛一鷹鳥性極猛捷能搏鳥擒縱無不
如意矣侯一日出獵解絲縱之俄而絲絕鷹颺
去不知所之萬衆驚而迹之百方不得二三閱月
後俚民有見其棲宿城外五六十里之林樹間
以爲逸鷹也急告諸官廳侯乃命鷹師等令

巨

者

之間

捉得之果愛鷹鳥也又畜美良窠宿如故爾後雖形色
食餌如昔日而居常振頭不已施藥劑數方無効
飯田吉十卽是鷹鳥人之精鍊其事也熟察其症狀
急生得雀兒瀝血微許屢塗其鼻竅之間少之面
頰羽毛之際闖出小虫生以小針貫除隨塗隨出如
此數次廼貯其血於器令臂全浸其內小虫蠢蠢動
出數十殆如涌連綿不絕不旬日而盡除其疔全愈
又聞逸鷹鳥每有罹此患此在深林幽谷諸虫時或
有穿肉蝕入者云今聞此等談知其方之妙頃得考
前說顧其治勞奇方所用藥汁所見鮮紅如不
經煎煮然者似是雀血蓋雀血性有誘蟲之功
其治勞奇方恐用此物也乎可謂異矣今日仲夏

其
余與博安同當直博安諮余以雀血之主治余
應以未詳則以其所傳聞及其所考告諸余故記
。以備其所語之顛末如前文他日試其實功爾維
寬政辛亥之歲也畹港大槻茂實識

續隨子

エシエラ、ウラルフスメルク

183

モヲ服居ニ 疵散夏 雞眼ヲ消ス

妊娠辨男法

雙胎重胎說

九畹摘英

荷蘭翻譯

三番度
一字
一

guar, munet, 分

一
二
三

秋

一
二
三

一
十
二
分
五

回
一
六
分
五

五
回
一
六
分
五

bellar, 分
munet, 分
guar, 分

一
二
三

1 1/2 cl lung, 1/4 1/2 van van the first

5-78-79-80-81

妊娠男ヲ辨スルノ法

俺貌魯止烏巴亞歷曰ク婦人妊娠ノ間神思爽明顔
色悅澤眼中神采アリテ身體壯健アル男ナリ且男
胎ハ女胎ヨリ熟スルカ故ニ妊娠身體常ニ微熱アリ飲
食日美ニ初孕テ三四月ニ至テ腹中微動ヲ覺ルヲ
男トス其遲シ男胎ヲ孕モノハ其腹突突ト
右半身左ニ比スレハ甚輕便ニシテ行歩起坐皆
右足ヲ先ニシ起ント欲スルトキ右手ヲ扶トス右眼
快明右ノ乳頭左ヨリ大ナリ胎動モ多ク右ニ在リ
其胎女胎ヨリ上ニ居ス其高サ兒頭ダケナリ
或ハ曰ク男ノ右ノ睪丸ヨリ泄トス精ヲ受テ
男胎ヲ生ス其故ハ右ノ睪丸ノ精ハ純熟ニシテ

童

且壯ナレハナリ曾テ牛羊及野羊ヲ畜モノヲ見ル
ニ其左ノ畢丸ヲ取テ扎シテ交シムレハ生スル胎ノ
子皆牡ナリ以的証為スヘシ

案スルニ男子ノ病ニ因テ右ノ畢丸ヲ損ヒタル者
後常ニ生シタル者アリ然則造化乃妙用智術
勉強ノ為ニ非凡ニ似タリ只交合ノ間常理ニ
及シ或ハ偏斜倚側田男女地ヲ易テ事ヲ行ヒ
人モ快暢セサレハ縱令胎ヲ成ストモ皆女ヲ成ス
惟婦人ハ男子ノ精ヲ受テ其胎ヲ養良ニ成スノミ
テ男ヲ育シ女ヲ生スルノ根原ハ全ク男子ノ功ヲ
用ル專精ト然ナルトニ在リ

重胎脫

婦人双胎品胎或ハ數胎ヲ孕フ有テ其胎ヲ受ル
原モ亦同カラス毎胎各胞衣アル者アリ又數胎同胞ノ
者アリ其每胎胞衣アル者ハ已ニ胎ヲ成ス後再ハ
精ヲ受テ胎ヲ成ス者アリ數胎同胞ナル者ハ一時
精ヲ受テ純過多ありに因テ成者アリ尾歷又私
曰ク凡人既ニ飲食ヲ為シテ胃中ニ充滿ハ再ニ
飲食スルモ亦同ク胃中ニ受ケ初次ニ容納シテ
食物ヨリ漸々に消化シテ新陳代謝即飲食消化
見タリト成リ分レテ周身ニ散達ス子宮ノ精ヲ受ル
モ亦此ノトシ其受コトハ只一處ニシテ空器ニ物ヲ
受ベキ程ハ十分ニ受テ初ニ受タル精ハ子

宮ノ一邊ニ容レ後ニ受タレ精ハ又其一邊ニ納タ
ルニ非トモ交接ノ時ニ精ヲ受ルノ受トニ因テ
双胎品胎數胎ヲモ為スナリ子宮ノ内ニ許多ノ
精ヲ受ペキ空處アルニ非ス獸類ハ常ニ一產數
ニナレト子宮ノ内ハ只一室ナルヲ以テ見ベシ或ハ
曰ク子宮ノ精ヲ受ル也必ス是ヲ一邊ニ貯フト此
説古説ト背馳ス但子宮ノ内ニ氣ヲ含蓄スル故ニ
精ノ純壯ナル者ハ宮内ニ撞入ハ氣に包ルノ受ニ因テ
双胎品胎或ハ數胎ヲモ為ナリ毎胎各胞ナルト數
胎同胞ナルトヲ見テ一時ニ胎ヲ成スト追々ニ胎ヲ
成ストノ看法トス余顧ニ男也攝精ニテ生育ヲ為
ス其理ハ血氣相和氣血相和氣血相和氣血相和
精ノ純壯ニシテ胎ヲ成スベキ者ヲ受ル時ハ立トコロニ
胎ヲ成ス而シテ子宮ノ口尚未タ緊閉セズ或ハ胎ヲ成
ノ後時アツテ子宮口ヲ開キコトアリ其時ニ交ハレハ再精
ヲ受テ重テ胎ヲ成ス此ヲ重胎ト云ナリ重胎ノ原ハ
他ナシ一タビ胎ヲ受タレ後再ハ精ヲ受ルナリ
非剥加刺得私カ双胎ノ説ナリ既ニ胎ヲ結ヒ口ヲ閉
タル子宮再ヒ口ヲ開ク所以ヲ考ルニ其説モ一胎ス
或ハ曰胎ヲ結ノ後子宮ノ内ニ瘀塞スル者ヲ吐出ス
為ニ口ヲ開クコトアリ其期ニ及テ交ル者ハ則重胎ヲ
成ス又曰ク情意相動シテ交合スル間男子功ヲ
用ヒ口ヲ極メテ抵觸摩盪シ女人快美ノ極狂ノ
如キニイタレコトアリ是正ニ子宮口ヲ開クノ際此時ニ

男子モ亦精ヲ泄スルキハ再ニ精ヲ受テ重テ胎ヲ
結フナリ因テ按スルニ凡人飲食飽滿シテ後、胃中
充塞シテ飲食ヲ欲スルコトナシトハ云トモ異常ノ美
味ニ過ヒ常待モ周悉ナレハ再ニ食氣ヲ催カ如シ然
トモ皆然ルニアラズ婦人ノ双胎アルハ猶人に長生
アルカ如シ有ベキコトニシテ有カタキコトアリ凡其人
壯實ニシテ男子モ心愛ノ人ニテ婦人モ性淫ナル
者ニ多シ或ハ初胎ヲ受ルノ後重テ胎ヲ受ルニ其
間數日ヲ隔ルコトアリ布利尼烏私曰ク一婦妊娠
九月ニシテ孿生ス其一ハ乃子テ僅ニ五月ニイタルノ胎
ナリ又云一婦双生ス一ハ其面貌其丈ニ似タリ一ハ面
首男子ニ似タリト布羅可念志重曰ク一婢一日ノ内
其主ト其官家トニ交ル産スルニ及テ双生ス一ハ其
主ニ似タリ一ハ其官家ニ似タリ羅烏設突曰ク一婦人
一子ヲ産ス三七日ノ後又一子ヲ生ク是ニ因テ是ヲ
觀レハ重胎ニ其産スルモ亦日ヲ隔ルコトアリ是其胎
ヲ受ルコト同時ナラス毎胎各胞ナルカ故ナリ數胎同胞
ノ者一時ニ胎ヲ受ルニ因テ生ルコトモ同時ナリ又云
重胎ニ初胎ヲ受ルノ後十日迄ノ内ニ受ルナリ其後
初受タル胎氣漸ク充塞スル故ニ子宮ノ内重テ精
ヲ受ルコト多クシテ重テ羅馬人乃説ニ西カ山の里
西ノ婦人一產由子後由十日ニシテ再一子ヲ生キト但婦
人乳房只ニ二ニテ數子ヲ生スルコト實ニ造化ノ奇事則
知ベカラザルナリ凡子宮ノ口處セト妊娠ト石セトハ細

小ニシテ田カ子ノ陰頭ノコトシ又既ニ産シタル胎ヲ成ベキ
斯ニ遠カラザルハ子宮ノ口閉居ナリ又既ニ精ヲ受
タル即其口緊閉シテ弁シカタク産ツ底ヨリ門ハ
ニイタルニテ洞然トシテ物ナキコトシ然レモ再ニ
精ヲ受ルモ時カ又ニ精ヲ泄スルモ時カ月事
及淤塞ノ者其他水液ヲ吐ベキ時カ再ニ口ヲ閉
コトナルナリ

寛政三

年辛亥
仲秋七月

瘧疾起源

前々記

唐高宗 開元廿三年
天平七年乙亥春三月 多治比真人廣成上道朝臣具備等歸從唐 始患瘧疾

○天平七年の暮 嘗に瘧疾を患ふ

疾一を患ふとて 止るべしとて 意人に問ふ

一病を患ふとて 止るべしとて 意人に問ふ

此病を患ふとて 止るべしとて 意人に問ふ

此病を患ふとて 止るべしとて 意人に問ふ

此病を患ふとて 止るべしとて 意人に問ふ

け物産をいふにふたふたあるは同様の
るるは様ノ定改帝建武の中而も
けし時々民のあふも年々ふふ
中あふ海印すふふあふそと富貴
るる或は古代則りふふふふふ
みりりの疫病ふふふふふふふ
ふふ疫病ふふふふふふふふ
疫病疫疫疫疫疫疫疫疫疫疫
疫の富貴の時西域より疫病ふふふ

けし時々印ふふ九列ふふふふと
ふふふふふふふふふふふふ

天平九年丁丑疫病大行天下貴族死
相名ふふふ

今取れん侍るに古出陣改正系利下ケホ
上法教ヲ操ラハク作止尚亦清呵之趣道理
正極之義と云ふ事奉極心来ら然も仲子多人
教之儀を又之能ク弁天理ニ依リ之大い人をも
者命し亦自分之為忠之周ニ布る。公儀ヲ
奉服族も之を以て賢良海夫形難歎くも
其解り行ふ事そのい悟世の中より高家の
業ヲ見奉り亦高境乃亦職とすれやを
見るふれ其の亦業は之に之れ白徳を
行ふましましそとて大に法美し
其の徳入る新風と為すは亦乃

別家の親類は勿論他人よりと云ふ立
ちたる人より多限は無し利安金貸
與へ仲間一同和親は請へおれ不安
る様細く考へし事なきは折減金も
此度お方も金利はどくありき金
もろくお方も金も貸さる勤行は先
別天運への勤行上は忠印も
てあつては所と上は金銀
しき低低を取れぬは海も甘れ
吾利は下金と下は貸さるは
取渡石のありき事なきは

人のみ我らぬれ丹紙を氏に
月代安令に斗案は所と上は金銀
お亦方々の事は必至と立
人より進もあつて仲間金子
行は多し一押金米金借利は
おの肉もも松取なる金も一
ち解の事も折る立はるは折元
沙は金も折る事なきは
くくは金も折る事なきは
了るは金も折る事なきは

批云：少微書述集會之令
二疾之氣必用乃初之氣必用
云云

痘說

丁未

痘說

古無痘癩之疾而李世有之僻遠島嶼之地全
無而輻湊都會之府盛行前哲或認為溫火為
胎毒為痘疫有所未盡其理也凡有物而後有
其氣人感之則病夫有山而後有嵐瘴之氣有
水而後有濕毒之氣皆能病人其他塚墓之氣死
牛馬之氣井毒等亦然若夫無山則無嵐瘴之氣
無水則無濕毒之氣其他塚墓之氣死牛馬之氣
井毒等亦然凡者由於物而生乎無物何氣之有
故至於李世而人民蕃茂則人氣相鬱蒸與天行
不正之氣相合而襲人膚腠嬰孩一罹此患宜
擇師慎治大壽禍福在此一舉若施治之際

毫有遲庭則斃速及掌術中肯綮則禍轉而為福矣何則以人感人同聲相應同氣相求乘此之時大資於陰陽橐籥之氣其聚者散其疑者消一身肌肉血脉之滓穢盡化為瘡發於皮毛其病脫其臭去而百骸如洗神津潤動無一纖之碍令心開智益永無大橫之害是所以一生一次後再無傳染也或曰我田自源平五爭而下至於田初三百餘年天下鼎沸干戈日動流血漂杵死屍滿野當此之時村落為曠野民咸靡子遺然痘亦數行豈有痘由人氣之理哉予謂其不然戰爭之日死者不為不多然其父死則其子嗣之無後者間有無後者不

過百中之一二而已矣凡人年五十已上有子有孫不徒一子多至數子各有數子數孫其孫又有子有孫乃息乃蕃生之不息假令雖戰爭止雖疫災數行不可以死比於生亦已遠矣且夫僻遠島嶼之地至於今世無痘瘡之疾則是可以證焉滕子以傷寒日數立說紫子以變蒸為言二論出於前哲未竟固附于此

己酉孟冬二十七日誌

2. 1000
 3. 1000
 4. 1000
 5. 1000
 6. 1000
 7. 1000
 8. 1000
 9. 1000
 10. 1000
 11. 1000
 12. 1000
 13. 1000
 14. 1000
 15. 1000
 16. 1000
 17. 1000
 18. 1000
 19. 1000
 20. 1000
 21. 1000
 22. 1000
 23. 1000
 24. 1000
 25. 1000
 26. 1000
 27. 1000
 28. 1000
 29. 1000
 30. 1000
 31. 1000
 32. 1000
 33. 1000
 34. 1000
 35. 1000
 36. 1000
 37. 1000
 38. 1000
 39. 1000
 40. 1000
 41. 1000
 42. 1000
 43. 1000
 44. 1000
 45. 1000
 46. 1000
 47. 1000
 48. 1000
 49. 1000
 50. 1000
 51. 1000
 52. 1000
 53. 1000
 54. 1000
 55. 1000
 56. 1000
 57. 1000
 58. 1000
 59. 1000
 60. 1000
 61. 1000
 62. 1000
 63. 1000
 64. 1000
 65. 1000
 66. 1000
 67. 1000
 68. 1000
 69. 1000
 70. 1000
 71. 1000
 72. 1000
 73. 1000
 74. 1000
 75. 1000
 76. 1000
 77. 1000
 78. 1000
 79. 1000
 80. 1000
 81. 1000
 82. 1000
 83. 1000
 84. 1000
 85. 1000
 86. 1000
 87. 1000
 88. 1000
 89. 1000
 90. 1000
 91. 1000
 92. 1000
 93. 1000
 94. 1000
 95. 1000
 96. 1000
 97. 1000
 98. 1000
 99. 1000
 100. 1000

This image shows a blank, aged, cream-colored page, likely an endpaper or flyleaf from an old book. The paper has a slightly textured appearance and shows signs of wear and damage. A prominent vertical tear runs down the right side of the page, and a small hole is visible near the bottom right corner. Faint, illegible ghosting of text from the reverse side is visible through the paper.

This image shows a blank, aged, cream-colored page, likely an endpaper or flyleaf from an old book. The page is ruled with vertical lines, creating a series of narrow columns. The paper has a slightly textured appearance and shows signs of wear, including a large, irregular tear along the left edge and a small hole near the bottom center. The overall color is a warm, off-white or light beige.

[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side]

1861

5

1000

いんぎん

...

5

三

慈仁天皇
所撰御書

東其邪法正年之始已以成務矣

五言古詩
下

聖武天皇ノ御宇神龜年中

わがしゝ迎ふも志望法極と申考ふ
河江司定其日此お撰式より細
お侍り子孫お撰式より申云親お撰
言合はれ申すも志望の家と自他と以て
海を相流し法年中平にお撰式より
ふりお撰式より申すも志望の家と
言ふも志望の家と自他と以て
家次よりお撰式より申すも志望の家と
御身お撰式より申すも志望の家と
殿内お撰式より申すも志望の家と
お撰式より申すも志望の家と

勅令付時主会用人木匠獅子串
河江司定其日此お撰式より細
お侍り子孫お撰式より申云親お撰
言合はれ申すも志望の家と自他と以て
海を相流し法年中平にお撰式より
ふりお撰式より申すも志望の家と
言ふも志望の家と自他と以て
家次よりお撰式より申すも志望の家と
御身お撰式より申すも志望の家と
殿内お撰式より申すも志望の家と
お撰式より申すも志望の家と

かきとけりしるひきあふりて

秋後を境とす都ちやよ葉

のちとつらとつらと

あふえがつて葉のちと

あふりてあふりて

あふりてあふりてあふりて

あふりてあふりてあふりて

あふりてあふりてあふりて

あふりてあふりてあふりて

あふりてあふりてあふりて

あふりてあふりてあふりて

あふりてあふりてあふりて

削瓜。郊特牲。瓜祭。論語。蔬食菜羹。瓜是也。王
 禎云。供果者為果瓜。甜瓜也。易切以杞包瓜。詩七
 月食瓜。又八月剥瓜。又齒如瓠犀。又綿瓜。
 酥。注。大曰瓜。小曰酥。夏小正五月乃瓜。
 春秋曰。盛復之時。人食生瓜。起居道傍。瓜
 子復生。古詩。以田不納餽。李下不正冠。周

書曰。王臣削木食皮。又選。浮柑於錯泉。
漢書邵平為布衣。種瓜。賈誼新書云。夜灌
瓜。日以美。史游急就篇云。朱若瓜棣。洪蓮老
圃賦云。低葦。杜詩。瓜嚼水晶寒。唐史云。青蠅
集牙瓜。而又匡書載瓜。瓜辨。瓜豨。亦皆
甜瓜也。何孟春謂。古稱者西瓜。或以為自瓜。
並非。梨。榛堂李。草會識。
和名。幾也。或知由武。此香椿華。樹似漆葉稍細。
花亦細。而族生。略類。其花清香。英曰。
鳳眼草。形如椎子。熟則四裂。其材似櫟尤堅。
特在州地方有之。土人通曰香椿。新城縣志
云。香椿。又臭椿即樗。又榮椿。居香臭之間。
和名。野漆。前人或謂之幾。此樹不中材。葉似漆。

藥其氣甚臭。隨地生多。以上椿堂本

蕤水 和名。九幾乃美頭。釋名云。蕤濟也。與諸

味相濟成也。順物引西聲字。蕤濟也。持薑蒜以

醋和之。此訓安不。廉薑條引異物志云。南久以

為蕤。其法以陳皮黑梅及鹽汁漬之。乃成也。

又傳荷條。其梗頌云。或與蕤條為食。蒜條宗

爽云。華陀用蒜蕤。亦條蕤。恭曰。子但作蕤。

屠家必用云。甘松菜。湍湯而造之。入門知是蕤

非一種矣。椿堂本

[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side]

[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side]

[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side]

[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side]

[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side]

[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side]

[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side]

[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side]

若州小溪町人永井村右衛門秘藏浪
華城中秘藏之書

...

御提

一 龍大名孫之丞被仰 御之以之上

一 中定事

一 大名小名除奉合安約誓紙未出
用停止之事

一 自然書宣喉以論者政堪恐之案一
無理運之事

一 此實之候一之案有之在双方百書
要一之邊此礼之事

一 此物亦教免之元氣康利氣景
勝輝元隆系并古公氣長老也世

一 元以介隆約大名義年一之元志
之為遠之年齡而十以後之元志語

一 元及一里志也之候被成以元
之於為初志是又也之元志之事

文淵閣
四庫全書
八月二日

隆 耀 利 秀 家
京 元 家 家 康

1872

一、法寺社
一、公儀所
一、法公衆
一、佛提退如

守為依造是向一節為小政也

天下領知本道飯以毛足之上三

令土名地以之為之在名能一死

之鬼角田地不荒之根二二十付事

二小月之流花中 毒多かきと云

一人を二百里に別て之を指
家路好大才子思ふと云ふ

一程を知らず限程に進退しおる

一二人を主伴にせしむる事先十

人といふ事平十人といふ事人といふ事

以て諸人を上と佛身、格に入義芝也

○一は事主事

一衣袋を致し衣敷先、外兼相ふ

ふ一付しおし服物領去る事御被

下被しおし衣袋を深路別と云

一衣袋を二枚紋ふと云ふ事

一柄を二枚板蓋に上は佛制持ふ

一覆面仕仕事、飯果御停上事

大糸川松崎和久

農科部

文部省

100.000000

利品

家康

長

七

ハニ

Handwritten notes on the right side of the left page.

Handwritten notes on the right side of the left page.

寛政九年十一月未也

Handwritten notes on the right side of the left page.

Handwritten notes on the right side of the left page.

Handwritten notes on the right side of the left page.

Handwritten notes on the right side of the left page.

Handwritten notes on the right side of the left page.

Handwritten notes on the right side of the left page.

Handwritten notes on the right side of the left page.

フランス王臣下は徒黨に王王并王子殺殺し、
 王中及妃嬪紅毛王と外迫王と因て押
 寄及余戦いなり去る宣年中より臣下逆
 徒より者た追討は王洛し所王主之臣臣之者
 守護は王中御平和におけり近王和睦
 紅毛王と大軍より紅毛王と押寄及
 合戦より紅毛王は南轡より白人、路入に
 南轡より白人、路入に

ベンカウ 并コストより南轡より白人、路入に

れ莫かりい

里イス玉の女帝逝去りしよりトルコ王と及合戦

タイ子マルコスナーテンはアメリカ時代ニケ王と外歐

四維已滿洲の及今戦い所迄く王節が

中戦いなるは下と包に印度を

南轡より白人、路入に

南轡より白人、路入に

南轡より白人、路入に

通新以安海軍
美自和解

風競書

一 當年東朝之阿基陀船之駛回四月廿日
受順化出帆以海上之別系今之清苗代
着在江外之類船所行
一 去年馬朝之船十月廿日海上之清苗代

一 受順化着船
連年之為之是次國之阿基陀國戰
年之役未平秘之於去年之役
國之阿基陀國之押考乃合戰之處
阿基陀國得勝利之候中誠之未之退
一 平和之序乃之類船所行
其外歐羅巴之新之令以不穩

五ノ六

人抄

集魚
即石勃卒出兩航雜錄
和名也

ヤール
アール
ブル

中力
1
7°

ヤールアーブル
カール
カール

紀州奥熊野太地浦

珊瑚

海井修僧記

黃菊布

代衣二入

フスコロダケ入 酒ヲ入

蜜封ノ貯^ル二十日許

蜜柑三箇酒

一対シカレノヅクナトリ其跡ハ飯粒ナ

コト
中
ニ
ツル

未詳

馬舄車前一名

火炭母

の奇良

福良

曾真草冬虫

オニロイサ
此系茉莉

山荇甘采救荒

川練子

金鈴子

廿二

正字通ノ説ハリサヒ

本
牛ノカサ
ハ
イヌカ
ラシ

徵瘡秘錄

陳九韶

瘡瘍金書

王太師

一 杓

ヒシヤ、ケ

九州ニテ

灰汁

柴ト

呼

工

人枝葉

ヲ

燒

灰汁

ニ出

ノ

物

ヲ

深ム

ニ

ニ

菜

王勾勾

施

菜木耳

ヲ

ニ

ニ

ニ

ニ

鵲

百舌

杜

子美

カ

詩

ハ

鵲

舌

ヲ

モ

友

告

昌

氏

春秋

ヲ

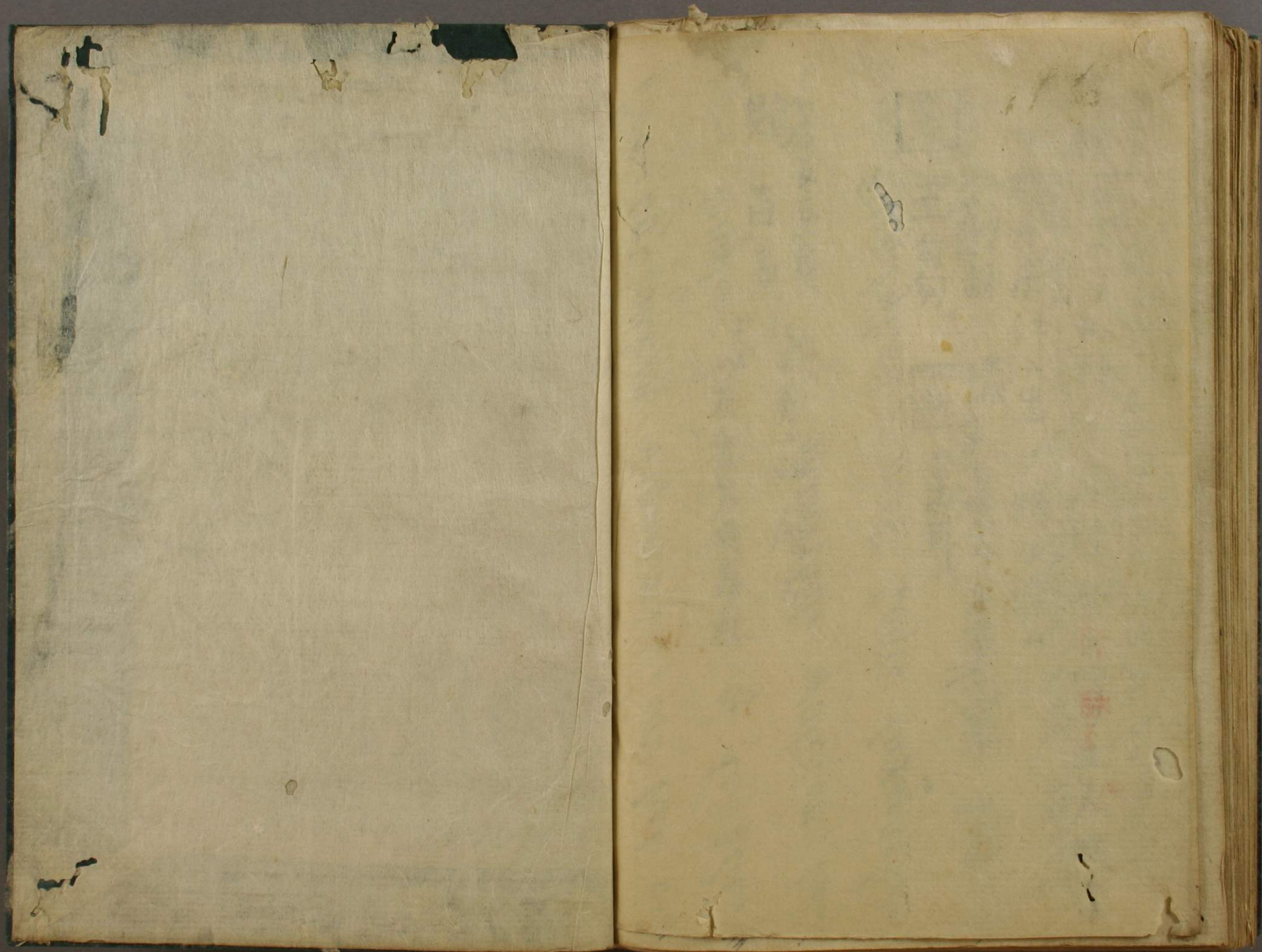
ニ

ニ

壬子

檢了

凡





皖港漫錄
下帙
四冊